J.S.S.S.W NEWS

日本ソーシャルワーク学会通信

2023年12月22日

【発行責任者】小山　隆

【編集責任者】池田　雅子・杉野　聖子

No.137

Contents

Ⅰ. 巻頭言　リスキリング時代の福祉・職業教育に思うこと …… 1

Ⅱ. 日本ソーシャルワーク学会第40回大会報告 …… 2

Ⅲ. 2023年度第1回理事会報告 …… 14

Ⅳ. 2023年度第2回理事会報告 …… 17

Ⅴ. 2023年度総会報告 …… 19

Ⅵ. Ⅴに関連して2022年度決算および2023年度予算書 …… 30

Ⅶ. 会員の声 …… 34

Ⅰ. 巻頭言

リスキリング時代の福祉・職業教育に思うこと

江戸川学園おおたかの森専門学校　**杉野　聖子**

（学会理事 / 研究推進第2委員会、総務委員会）

19世紀以降、世界規模での社会の変化は目まぐるしい。新しい技術が生まれ、それにより人々の生活は大きく変化してきた。人生100年時代になって子どもの頃に学んだこと、作り上げてきた価値が、子どもから大人への個人の成長だけでなく社会や環境の変化により大きく影響を受けていることは、どの人も感じることであろう。特に家族や家庭に関する考え方、人に対する考え方、人生の生き方については、多様性と柔軟性を広め、従来からの価値と対立しながらも融合し変容の過渡期にある。多様な考え方の容認は人々に多くの選択肢を与えるとともに、同時にその中から選び取る選択力と決断力を求めるようになってきた。そのため考えられる人は考える、動ける人は動く、逆に考えられない人、動けない人は置き去りにされていく風潮にある中、逆にそういった人を作らない、専門的にすべての人々の人生や暮らしを支援する職が求められて久しい。

過去のまま未来を生きることが簡単では無くなった現代において、特に職業生活における新しいスキルを身に付けるための「リスキリング」が国を挙げて推奨されている。「リスキリング」の定義について、一般社団法人ジャパン・リスキリング・イニシアチブのホームページ（https://jp-reskilling.org/whatisreskilling）では、「新しいことを学び、新しいスキルを身につけ実践し、そして新しい業務や職種に就くこと」としており、「個人が自主的に好きなことを学ぶ『学び直し』とは異なる」としている。また「リスキリング」は「DX（デジタル・トランスフォーメーション）GX（グリーン・トランスフォーメーション）等の組織変革に基づいて行われ」、「そのためリスキリングは組織が実施責任を持つ『業務』」となると示している。経済産業省、厚生労働省、文部科学省がリスキリングを推し進めるための補助事業を新設・拡充し、まさに未来に向けての人への投資として5年で1兆円を投入する方針を打ち出し着手している。厚生労働省は教育訓練給付金、人材開発支援助成金、特定求職者雇用開発助成金（成長分野等人材確保・育成コース ）、公的職業訓練のデジタル分野の重点化によるデジタル推進人材の育成、などの従来からの就業のための教育訓練の拡充と助成に加え、キャリアコンサルティングによる個人のキャリア開発への支

援を実施している。

私事ではあるが、福祉系の資格取得を目指す専門学校に着任して、今年で13年目を迎える。入職前、専門学校は学ぶテーマや目指すものが明確であるので、自分の学びたいことをはっきりと持ち目的意識の比較的高い学生が入学する学校という一般的な認識でいた。勤務し始めてすぐそれは100％ではないことに気付かされる。高校新卒で入学する学生には大学同様、「自分がまだ何をしたいのかがわからない。」「親が進学するなら資格を取れるところに、と言って専門学校を勧められた。」など入学動機にはかなりの個人差があった。そのため、興味関心が他分野に移った者はもちろん、実習に行き現場と経験した実際のギャップに違和感が拭えなかった者、自分には専門職の適性がないと感じた者、そして学習すること自体に意欲を持てなくなった学生は中退していく。専門学校は専門学習中心なので目指す道への近道であるものの、興味・関心・意欲が無くなると継続すること自体困難になりやすい。また、専門学校（最近は大学でもお見掛けすることが多くなってきたが、）ではキャリアチェンジのための資格取得として、高校新卒者以外の社会人経験のある入学者も存在する。中でも近年、18歳人口の減少と大学全入時代の波に押されて、専門学校は学生獲得が厳しくなる一方で、職業教育機関として公共職業訓練の委託訓練を受けることもある。キャリアコンサルティングを受けて、「本訓練を受講するのが適当である」と認定された方が入学されるのであるが、やはり訓練に至るまでのプロセスは千差万別で、個別に寄り添いながら学習支援・就職支援を行わなければならない。

介護・保育人材を育成することは、この国の急務であり、「新しいことを学び、新しいスキルを身につけ実践し、そして新しい業務や職種に就くこと」として本校のような専門学校がその一翼を担っているのは事実であるが、そこで伝えるべきものは何なのであろうか、と考える。ある介護コースの職業訓練生と卒業時の面談で次のように言われたことがある。「先生、私は介護福祉士の資格を取って現場で働くために、専門学校に入学してきました。学校で学ぶのは、介護の技術だと思っていましたから、実際には座学や講義が多いなと最初は感じました。しかし、卒業する今になって、学校に在籍した2年間の意味がわかった気がします。学校ではなぜ、何のために、どんな考え方を持って介護をするのか、ということを徹底して学んだ気がします。」彼女の言葉の中に、職業教育の本質があるような気がしてならない。学修期間の中でそのことをきちんとキャッチし、自分の道として選べた学生が資格取得し、現場でその能力を活かしてくれることを日々願っている。

新たなスキルを身に付けること、それはもちろん大切なことである。リスキリングの機運が高まるのを契機に、単なる新しいスキルを身に付けて転職する職域を広げるだけでなく、自分は何のためにこの仕事をするのか、ということを人々が問い直す機会にもなっているのではないかと感じている。

Ⅱ．日本ソーシャルワーク学会第40回大会報告

大会テーマ：実践現場からの情報発信と実践研究　～震災復興支援の経験を踏まえて～
日　　程：2023年7月8日（土）～9日（日）
会　　場：東北福祉大学　仙台駅東口キャンパス

1．大会開催校からのあいさつ
「日本ソーシャルワーク学会第40回大会」を終えて（お礼）

東北福祉大学　**田中　尚**
（第40回大会実行委員会委員長）

杜の都仙台での「日本ソーシャルワーク学会第40回大会」においては、200名を超える参加者のもと大

会を無事に終えることができ、学会の理事の皆さんをはじめ、大会の準備・運営にかかわられた多くの方々のご協力とご尽力に心より感謝申しあげます。

本年の5月より、新型コロナウイルスの感染法上の5類への移行により、これまでの行動制限や自粛要請がおおきく変わっていくなかでの大会準備となり、さまざまな配慮や検討を行うなかでの大会の運営でありました。そのことから、大会案内や情報提供、準備全般において、会員の皆様にはご心配をおかけすることもあったことと思います。そのような不十分なところも多々あったことと思いますが、大会を終了し、来年度の東京での大会の開催、そして「今後の50回大会」に向けてのバトンを繋ぐことができたことに安堵しています。

第40回　大会長挨拶
（東北福祉大学学長　千葉　公慈　氏）

また、今回の大会の準備においては、ソーシャルワーク職能団体の後援をいただき、宮城県内の会員の皆さんに実行委員として全面的な協力をいただくことができました。本学会の目指すところの「ソーシャルワークの実践及び理論の研究及びに教育を通じ、ソーシャルワークの実践及び理論のレベルの向上を図り、ひいては社会福祉の発展に資する」うえで、実践と理論の一体的研究とその実践への還元といった往還的活動は欠くことのできないものであり、それらを本大会において多少なりとも具現化できていれば幸いに思います。

そして、今回の大会の大会校企画として、「東日本大震災後のソーシャルワーク」をテーマにさせていただきましたことにも感謝申し上げます。東北の地で経験した震災からの復興を通してのソーシャルワークをどのように評価し、今後にどのようにつなげていくことができるのか。今回の企画では、その現在地を発信し、その特殊性と普遍性を問い続けていくことの意義を確認できたように思います。

最後になりますが、大会を対面で一堂に会することの熱気と交流の意義を感じることができました。プログラムの間の休憩時間や終了後の会場に漂う空気や集いの余白に意味を見ることができ、キャリーバックを引き帰路に向かう後ろ姿に感謝の思いを新たにいたしました。

2. 基調講演
「実践現場からの情報発信と実践研究～震災復興支援の経験を踏まえて」を振り返って

東北福祉大学副学長・教授　**大島　巌　氏**
（学会副会長／／研究推進第3委員会）
東北福祉大学　准教授　**竹之内　章代　氏**

第40回を迎えた日本ソーシャルワーク学会大会・宮城大会では、近年、本学会が力を入れて来たソーシャルワーク職能団体との連携を深める取組みの一環として、「実践現場からの情報発信と実践研究」を取り上げました。そしてこの大会には、多くの実践家の皆さんにもお集まり頂き、ご一緒に実践研究のあり方と、「実践現場からの情報発信」の意義を、共に議論する場にできればと考えて、大会テーマを設定しました。

基調講演では、大会テーマのもと2日間のプログラムの枠組みを提示する意図をもって講演を行いました。講演に当たって私たちは、改めて実践研究の意義と各研究分野・各実践領域別の取組みと、その中に占める、実践研究による「情報発信の意義」に関して、体系的に文献収集・情報収集を行い、報告を行いまし

た。基調講演者としても、改めてこの機会を通じて多くのことを学び、その学びを大会に参集した約 200 名の実践家や研究者の皆さんと共有できたこと、さらにはその報告内容へのさまざまなフィードバックを頂けたことは、何より有意義なことでした。

中でもまず第 1 に、実践家にとっての「研究」の位置付けとして、実践的な PDCA の循環プロセスを回すために、「実践研究」が重要な役割を果たすことが改めて確認されました。具体的には、実践家が自ら行う支援や介入を計画・実施し、それを記録して振返り、実践現場で共有し、実践を改善する一連のプロセスに「研究」はたいへん有用です。そう考えると、実践的な循環プロセスにおいて、「実践研究」が日常的に行われることはごく自然な営みとなります。

また第 2 に、実践的な PDCA 循環プロセスに、科学的な研究方法を用いることを通して、実践知に関する情報発信力が強化され、実践知の蓄積と構造化が促進されることも確認されました。実践の循環プロセスにおいて、より科学的な研究方法を用いることで、実践知の共有範囲がさらに広がり、同じ課題・テーマを持つ仲間との出逢い、交流、ネットワーク形成が促進されます。そのために、学会活動や福祉系大学・大学院が重要な役割を果たすことも共有されたのではないかと考えます。

これらの好循環は震災復興の支援活動の中で、実践と研究の協働が実現しより優れた情報発信が促進されたことも確認できたように思います。

基調講演に対して、職能団体から指定発言として、野口百香会長（日本医療ソーシャルワーカー協会会長／日本ソーシャルワーカー連盟会長）、折腹実己子会長（宮城県社会福祉士会会長）からご発言を頂きました。いずれも大変に多忙で厳しい実践現場の現状の中で、実践と研究機関・大学との連携が欠くことができないことや、研究者がもっと実践の場に足を踏み入れて協働し、情報発信や実践研究の推進をサポートをすることが不可欠であること、そのための協働システムを構築することの重要性をご指摘を頂いたように思います。

参加された皆さまからも、その後さまざまなフィードバックを頂きましたが、概ね実践と研究は一体的に進めるべきこと、その中で情報を生み出し、発信することについて前向きのご意見を頂いたように思います。

参加者 79 名からご回答頂いた事後アンケートでも、大会参加に対する満足度はたいへん高く（96.2%）、「大会テーマについて 2 日間を通じて議論等したことがこれからの実践や研究、教育等に役に立つか」の問いに対しても、「大いに立つ」は 54.4%、「ある程度役立つ」が 38.0%を占めていました。また「満足したプログラム」のうち「基調講演」は、出席回答者 56 名のうち 30 名（53.6%）に選んで頂いており、講演でのメッセージは、一定程度、受け止めて頂いたように感じております。

基調講演

会場の様子

今後は、野口会長、折腹会長からのご指摘にあったように、研究サイドからももっと実践の場に足を踏み入れ、実践や職能団体と学会・大学との連携や協働を進めて行くシステムを築いて行くことができればと願っております。

改めまして、ご参加頂いた会員および共催団体会員の皆さま、運営に関わって頂いた多くの関係者の皆さまのご協力・ご関与・ご尽力に深謝いたしますと共に、大会校として、心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

3. 開催校企画シンポジウム
「実践現場からの情報発信と実践研究～震災復興支援の経験を踏まえた実践と研究の循環可能性～」

シンポジスト：

○大橋　雄介氏（NPO 法人アスイク　代表理事）

○田中　伸弥氏（社会福祉法人ライフの学校　理事長）

○真壁　さおり氏（宮城県社会福祉士会）

コーディネーター：

石附　敬（東北福祉大学　准教授）

指定発言者：

○田村　綾子氏（日本精神保健福祉士協会　会長）

○庄子　清典氏（宮城県社会福祉法人経営者協議会　会長）

コーディネーター　**石附　敬**

（東北福祉大学　准教授）

このシンポジウムでは、大会テーマを深めるために、震災復興支援の具体的な取組とその活動を社会に向けて積極的に発信されてきた３名（ＮＰＯ法人アスイク　大橋雄介氏、社会福祉法人ライフの学校　田中伸弥氏、宮城県社会福祉士会　真壁さおり氏）よりご報告いただきました。また、大島巌氏、竹之内章代氏から基調講演との関係について、「実践研究」の役割と、「実践現場からの情報発信と実践研究」の相乗作用についてコメントと、シンポジストとの意見交換が行われました。さらに、指定発言者として田村綾子氏（日本精神保健福祉士協会会長）、庄子清典氏（宮城県社会福祉法人経営者協議会会長）より、それぞれの団体のお立場からコメントをいただきました。

大橋氏は、震災後に顕在化した子どもの貧困問題に対し、子どもと家庭への支援を継続的に実施し、その現状を発信して支援者を募っていくという実践をされてきました。また、コロナ禍でも震災時の教訓から活動を止めてはいけないという思いで実践を続けられてきました。田中氏は、震災後に高齢者施設が地域に認知されていない現状を知り、そこから、子ども食堂や学習支援の取り組みをなど地域課題に即した活動を展開し、積極的に社会福祉法人の活動や資源を地域に開放し、合わせて情報発信にも取り組まれてきました。真壁氏は、被災地の支援者への支援に取り組まれ、その中でネットワーク形成の重要性となぜうまくいかないのかという疑問から、横串型のネットワークの必要性に気づき、それを作るための取り組みを進めてこられました。また、震災時に構築できた横串型ネットワークを平時にも維持していくことの必要性について情報発信されています。シンポジストの報告は、非常時に顕在化した社会課題への取り組みを発信することで、地域や社会へインパクトを与えその重要性を多くの人と共有し、協力者を拡大させることに繋がることや、非常時の取り組みから得られた知見が平常時にもいかせるものとして蓄積され、他の実践者に活用され

大会校企画シンポジウム

うることを示唆するものでした。

今回のシンポジウムは、実践現場における貴重な取組や経験を実践知として共有することの重要性を確認するとともに、実践研究とはどうあるべきなのか、研究者がどうかかわっていくことができるのか、実践者を養成する教育はどうあるべきなのかなどについて、職能団体の方々と学会員が共に考える有意義な機会となりました。

4. 第 40 回大会記念企画「座談会：学会創立 50 周年を展望する」

第 1 部　日本ソーシャルワーク学会の沿革と活動と今後の展望

登壇者

小山　隆　　会長　（同志社大学）

久保　美紀　副会長　（明治学院大学）

和気　純子　副会長　（東京都立大学）

大島　巌　　副会長　（東北福祉大学）

空閑　浩人　副会長　（同志社大学）

コーディネーター

志水　幸（北海道医療大学／学会理事）

白川　充（仙台白百合女子大学／学会理事）

第 2 部　座談会　指定討論者の発題（学会活動の評価と展望）

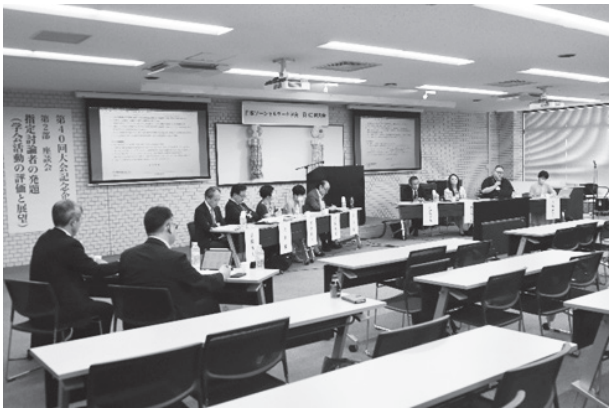
西島　善久　氏（日本社会福祉士会会長）

小原　眞知子　氏（日本医療ソーシャルワーカー協会副会長、日本社会事業大学、
国際ソーシャルワーカー連盟アジア太平洋地域会長）

ヴィラ―グ　ヴィクトル氏　（日本社会事業大学／学会理事）

大谷　京子　氏　（日本福祉大学／学会理事）

第１部　日本ソーシャルワーク学会の沿革と活動と今後の展望



第２部　指定討論者の発題（学会活動の評価と展望）

コーディネーター　**白川　充**
（仙台白百合女子大学／学会理事／研究推進第２委員会）

はじめに

学会終了後、ニュースレター担当者から原稿依頼があり快諾したが、よく考えてみると、私はこの座談会を企画したひとりであり、しかも当日のコーディネーターであった。当日の進行は時間が押して、参加者との意見交換ができなかった。その責任の一端を担う私が、この座談会の内容と感想を書くことに戸惑いはあるが、ここは、企画の意図と内容を中心に書かせていただくことで、その任を果たしたい。

企画の意図と内容

この座談会は 40 回大会の学会担当理事である志水幸氏（北海道医療大学）と私が中心となって企画したものである。その趣旨は資料集にあるように、日本ソーシャルワーク学会 40 回大会を記念し、学会の沿革と近年の活動を振り返るとともに、10 年後の 50 周年に向けて、学会の歩むべき方向性について展望することが目的であった。

そのため、学会からは会長、副会長（委員長）にご登壇いただいた。また学会に対する評価と要望を述べてもらうため、指定討論者として外部の関連団体から、西島善久氏（日本社会福祉士会会長）と小原眞知子氏（日本医療ソーシャルワーカー協会副会長）、また学会内部からは２名の理事、ヴィラーグ　ヴィクトル氏（日本社会事業大学）と大谷京子氏（日本福祉大学）に発題を依頼した。

第Ⅰ部は「日本ソーシャルワーク学会の沿革と活動と今後の展望」と題して、小山隆会長（同志社大学）より「日本ソーシャルワーク学会の沿革と組織」について、以下、久保美紀副会長（明治学院大学）より「第１委員会の活動と今後の展望」、和気純子副会長（東京都立大学）より「第２委員会の活動と今後の展望」、大島巌副会長（東北福祉大学）より「第３委員会の活動と今後の展望」、空閑浩人副会長（同志社大学）より「総務委員会の活動と今後の展望」についてご報告いただいた。

第Ⅱ部では、「指定討論者の発題（学会活動の評価と要望）と総括」ということで、先ほどの４人の指定討論者よりご発題いただいた。

まとめにかえて

当日の座談会では討論の時間をとることができなかった。結果として10年後の具体的な展望を語ることは十分できなかったが、ここでは「論点・課題」となったことを何点か紹介しておく。

○ソーシャルワーク実践（現場）との共同志向（学会のあり方と企画・活動、職能団体と連携）
○40回大会のテーマでもある実践研究についての共通理解と今後の取り組み
○日本ソーシャルワーク学会の位置と運営（年次大会のあり方等）についての検討
○加速度的に進むグローバル化への学会としての対応
○ソーシャルワーク研究と教育、その「魅力」の発信方法

10年後の50周年に向けて、学会が取り組むべき課題群はある程度明らかとなった。問題はここからどのように取り組んでいくかである。

5. 課題セッション
課題セッション①「震災復興支援におけるソーシャルワーク」

コーディネーター　**芳賀　恭司**
（東北福祉大学　准教授）

本セッションでは、「東日本大震災から12 年が過ぎ、未曽有の被害をもたらした震災の復興期間が終息する時期を迎えようとしている。目まぐるしく変化する現代社会にあって、震災の記憶は徐々に薄れ、人びとの意識も移ろっていくことも確かな現実ではある。一方、震災によって大きな生活課題を背負った人びとにとって、そのような移ろう現実のなかで、どのようにそれらの課題を乗り越えてきたのであろうか。そし

課題セッション①の様子

て、今なお、それらの課題に直面していたり、新たな課題として向き合っている現実にも目を向け、ソーシャルワーカーが震災からの復興過程の中で何を見つめ、何に応えてきたのか。そして、どのような課題に向き合っているのかについて考え、語り合うこと」をねらいとした。

セッションの冒頭、事前に実施した宮城県内職能団体会員への「災害・復興におけるソーシャルワークについて」の意識調査の調査報告を行った後、パネリストよりの報告を行った。

パネリストとして、西澤英之氏（宮城県社会福祉士会）、野田毅氏（宮城県社会福祉協議会経営者協議会）、福井康江氏（日本・医療ソーシャルワーカー協会）、三品竜浩氏（宮城県精神保健福祉士協会）を迎え、それぞれの職能団体が震災後に果たしてきたソーシャルワーク実践について報告を頂いた。それを受けて、菅野希氏（宮城県精神保健福祉士協会）、菊地知憲氏（宮城県医療ソーシャルワーカー協会）両氏の指定発言を挟み、フロアとの議論を展開した。

本セッションを通じて、被災地でソーシャルワークに携わる者の使命として、公的な支援が減少していく中にあっても、改めて被災者支援の継続を強く意識して行く事が肝要であるということを共有できたと考える。

課題セッション②　実践家の研究を支援する試み ―本学会ワークショップのこれまでの成果と課題　一人では難しくても仲間がいればできる―

コーディネーター　**佐藤　俊一**

（スピリチュアルケア研究会ちば・学会理事 / 研究推進第３委員会）

本セッションのねらい

これまでの実践研究支援ワークショップを振り返り、より現場のソーシャルワーカーが実践研究に取り組めるようにするための課題を明らかにすることがねらいです。なお、ワークショップは、まとめ役を保正友子委員（日本福祉大学）として、ファシリテーターとして研究推進第三委員会 / 出版・教材開発班のメンバーを中心に、小山会長、大島副会長、浅野貴博協力委員（ルーテル学院大学）の協力を得て実施されています。

このワークショップでは「研究計画書」を作成し、職場内、研究会、学会等で発表できることを到達目標にしています。まだ実績は少ないですが、嬉しいことに昨年と今回の大会で、それぞれ１名ずつの自由研究発表がありました。

セッションの内容

前半は、ワークショップの内容を知ってもらうために、昨年度行った３日間のプログラムに沿って各担当

課題セッション②の様子

者から研修内容と課題を駆け足で報告してもらいました。なお、プログラムの詳細については、大会抄録、本年度の募集要項をご参照ください。

後半は、先の２名の大会発表者、上野和美さん（船橋市二和八木が谷地域包括支援センター）、大塚明子さん（浅草寺福祉会館／オンライン参加）に、ワークショップ参加への動機、参加しての学びの実際、さらにその後にどのように研究に取り組み発表に至ったのか等を報告してもらいました。それを受けて改めて実践研究の魅力について小山会長からコメントいただき、続いて会場、オンライン参加者含めて全体討議を行いました。

議論や報告から明らかになったこと

ワークショップでは、問いの立て方等の研究に必要な基本的なことを講義形式で学び、また事前課題から始まり各自の研究のための取り組みをグループワークによって共有していきます。今回のセッションでは、グループワークによって研究の結果でだけでなくメンバーの取り組みのプロセスが見えたのがよかった。また、自分一人ではなく同じ仲間とプロセスを共有できていることが、支えとなったと参加者からの声があり、またファシリテーターも感じていたところでした。

開催日を１カ月ぐらい開けることで、ホームワークとして研究計画書の作成を自己学習で進めてもらっています。途中でファシリテーターに相談できるように工夫をしてきましたが、やはり個々の事情に応じて困難なことや不安が出てくることが明らかになりました。途中辞退者が出ている現状に対して、細やかな対応を改めて改めて検討する必要を感じたところです。

実践家にとっては仕事があることで問題の身近にいられます。同時に、仕事の多さで研究に取り組むのが困難になるという両面の現実があります。本人の努力だけでなく、経営者や管理者の理解も必要なことが指摘されました。今大会には、幸いなことに社会福祉法人経営者協議会からの参加もいただき、一緒に取り組むことの必要性を確認できことはよかったです。

ワークショップでは仲間に支えられてできること、また職場で研究する仲間を増やすこと、組織が理解してバックアップしてくれること、そして私たちワークショップ担当者が支えていくこと、いろいろな場面で一緒に取り組む「仲間がいればできる」ということを確認する機会となりました。これから、いただいた宿題を検討することで、私たちは、今年度のワークショップに臨んでいきたいです。

参加しての感想

船橋市二和八木が谷地域包括支援センター　**上野　和美**

研究発表に至るまでご支援いただいた先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。

２日間を通じ、先生方が実践者の多忙さ、業務と両立する苦労も考慮して下さっていると感じました。同時に、業務に追われる自分や同僚が、実践研究に向き合える動機や、継続できるには何が必要だろうかと考えました。やはり、研究と実践がリンクした感覚を得られたことが大きいです。実践の課題解決の糸口が見つかるのは非常に大きいです。

小山先生が、発言の中で「ワークショップ参加者が帰る場所となれるような場」を今後の課題として話されていましたが、まさにそういう場があると、ワークショップ参加者も安心できると思います。ワークショップに参加後も、不安が常にあります。大学院も出ていない一実践者が相談できる場があることや、実践研究の必要性を立ち止まり振り返る場があると心強いです。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

6. 自由研究発表
（第１分科会）

北海道医療大学 / 理事 / 座長　**志水　幸**

第 40 回大会は、2019 年開催の第 36 回大会（淑徳大学）以来の対面開催のもとで自由研究発表を行なった。第１分科会では、15：30 から 18：00 までの間、5 題の発表に基づき活発な議論が展開された。発表概要は、以下のとおりである。

第１発表は、「人口減少地域におけるひきこもり支援の『効果モデル』開発に向けて－秋田県藤里町における『地域トータルケア・包括支援』の取り組みから学ぶ－」（山田克弘：東大阪大学短期大学部・東北福祉大学大学院博士後期課程）である。本発表は、住民主体の地域福祉実践の好事例とされている当該地域の実践をプログラム評価の理論と方法を用いて記述し、「効果モデル」の糸口を見出すものであった。

第２発表は、「ソーシャルワークにおける現象学的研究の特質と可能性」（植田嘉好子：川崎医療福祉大学）である。本発表は、文献調査から抽出された、1）ウェルビーイングの危機にある人々の「生きられた経験」の解明、2）多職種連携／ネットワーク構築の困難さと解決への経験構造、3）現場実践や教育・学習の経験からみたソーシャルワークの専門性の主題について再分析を行なったものであった。

第３報告では、「当事者の知の潮流に照らしたピアサポートの理解」（黒田文：東北福祉大学）である。本発表は、一部のサービスにおいてピアサポートが報酬化され評価対象になっている状況に鑑み、改めて当事者の知と専門知の関係性（共存）について問うものであった。

第４発表は、「ソーシャルワーカーがユマニチュードを行使する意義と課題の検討」（渡辺修宏：国際医療福祉大学・日本精神保健福祉士協会会員・日本ソーシャルワーカー協会会員、中西正人：国際医療福祉大学・日本ソーシャルワーカー協会会員、畠山博之：国際医療福祉大学・日本ソーシャルワーカー協会会員）である。本発表は、ソーシャルワーカーがユマニチュードを行使する意義と課題について、ユマニチュードの哲学的・技術的位置付けの観点から明らかにするものであった。

第５発表は、「がん患者が体験したアドバンスド・ケア・プランニング（ACP）と望む生活」（阿比留典子：済生会福岡総合病院・西南学院大学博士後期課程）である。本発表は、がん患者と医療ソーシャルワーカーとの対話における本人の語りを定量分析およびナラティヴ分析を行い、社会構成主義の立場から ACP の体験や望む生活の特性について明らかにするものであった。

本分科会発表の内、第２発表および第３発表は JSPS 科研費の助成を受けた研究成果の一部であり、第４発表は 2015 年の第 32 回大会（日本社会事業大学）より実施してきた職能４団体との共催に基づく学会会員以外の資格によるものであった。

（第２分科会）

仙台白百合女子大学 / 理事 / 座長　**白川　充**

第２分科会では、以下の５件の自由研究報告がありました。

・第１報告『ソーシャルワークの価値と倫理に関する研究の動向－英米文献の分析を通して－』
（菊池　留美　同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士課程課程後期）

・第２報告『行動とその行動が¥を取り巻く環境との相互作用に着目したソーシャルワーク概念の検討」
（渡辺　修宏　国際医療福祉大学）

・第３報告『ソーシャルワークにおける「抑圧」概念の検討－文化的トラウマと集団的アイデンティティをめぐる議論を手がかりにして－』

（宮﨑 理　明治学院大学）

・第４報告『ソーシャルワーカーが抱くジレンマに関する一考察－ともに生きる社会をめざして　倫理綱領を意識した展開過程から－』

（北澤　和美　日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科博士課程）

・第５報告『医療ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ自覚機会のプロセス－沖縄県内 MSW へのインタビュー調査－』

（嘉手納　泉也　医療法人おもと会　大浜第一病院）

本大会の自由研究報告は、久しぶりの対面開催となり、第２分科会は常時 15 ～ 20 名が参加していました。5 つの報告はソーシャルワークに関する文献研究から質的研究まで、バラエティーに富んだ内容となり、それぞれの報告に対して、報告内容に関する質問から今後の研究の助言まで、さまざまな質疑応答が展開されました。休憩を挟むことなく２時間 30 分の長丁場となりましたが、報告者は時間を厳守し、予定通りの進行に基づく活気のある分科会となったことを報告いたします。

（第３分科会）

東京都立大学 / 理事 / 座長　**和気　純子**

第１報告は、上野和美氏による報告「地域包括支援センターにおけるセルフネグレクトについての考察～管理者と支援者の意識の分析を通して～」である。本報告では、センターの管理者および職員への半構造化インタビューにより、両者の差異を構造的に分析し、スーパービジョンのあり方を検討した研究から、支援者の情緒的な葛藤や管理者自身の揺らぎへの対応が必要であることが指摘された。これと関連するのが第４報告で、岡田まり氏が「スーパーバイザー養成研究の理論的枠組み」ついて報告した。スーパービジョンが十分に普及、定着していない日本において、スーパーバイザーのコンピテンシーを明らかにし、それを習得するための研修プログラムの開発と検証の必要性が指摘された。

第２報告は、山本大輔氏による報告で、「ソーシャルワーク実践におけるアセスメント～アセスメント支援ツール「e スキャナー」の施行と検討を通じて」である。利用者をエコシステム視座に基づき生活全体から理解する重要性のもとで、ICT を活用しつつ、利用者と支援者の双方の評価を継続的に把握、分析するツールが紹介・議論された。

第３報告と第５報告は、障害者福祉に関わる報告である。第３報告は、神林ミユキ氏による「やまゆり園事件の資料分析から得る人材育成の教訓」である。当該事件に関する論文・記事等の分析から、「優性思想」「施設職員による支援」「福祉職を取り巻く環境」に関する 83 点の記述を抽出し、ミクロ・メゾ・マクロレ

分科会の様子

ベルを一体的に把握し、働きかける実践力の涵養や、ソーシャルワーカーの３側面である「専門職」「労働者」「生活者」が相互に影響しあう様相が分析された。第５報告は、小沼聖治氏による「初任者精神保健福祉士のソーシャルアクションに対する認識と実践～グループインタビューの質的分析を通じて」である。初任者精神保健福祉士 13 名へのグループインタビューから、ソーシャルアクションの必要性を強く感じ、それを学んではきたが、実践を身近に感じにくく、具体的なイメージを持つことの困難さが示唆された。

領域や方法が異なる発題であったが、今日的課題に対する明確なリサーチクエスチョンをもとに、実践の質的向上をめざす意欲的な報告について、活発な意見交換がなされた。

7. 情報交換会
情報交換会の感想

宮城県精神保健福祉士協会　**菅野　希**

７月８･９日、東北福祉大学東口キャンパスにて日本ソーシャルワーク学会第 40 回大会が開催されました。今大会はハイブリッド形式での開催となりましたが、多くの方が仙台まで足を運んでくださいました。久しぶりの対面開催は、参加者の皆さまにとって有益な刺激となったのではないでしょうか。会場全体が活気と熱気に包まれておりました。

大会１日目のプログラム終了後、同会場にて情報交換会が開催されました。皆さん興奮冷めやらぬご様子で、大会同様こちらも大変盛り上がりました。それぞれ第一線で活躍されている実践者、教育者、研究者が一堂に会し、久しぶりの再会を懐かしまれ、新たな出会いが生まれ、会場のいたるところで意見交換や議論がなされておりました。まさに、対話を通し実践と研究の連続性が確認され、ソーシャルワーク実践研究のネットワークが広がり、深められていく瞬間でした。

このような時間にご一緒させていただいたことは、私にとっても大変貴重な学びと経験になりました。ありがとうございました。

情報交換会の様子

Ⅲ．2023 年度第 1 回理事会報告

○日時：2023 年 5 月 21 日（日）17 時～ 19 時　WEB（ZOOM）会議

○出席・欠席者一覧

役職	氏　名	所　　属	出欠
会　長	小山　　隆	同志社大学	出
副会長	久保　美紀	明治学院大学	出
	和気　純子	東京都立大学	出
	大島　　巌	東北福祉大学	出
	空閑　浩人	同志社大学	出
理　事	池田　雅子	北星学園大学	出
	大谷　京子	日本福祉大学	出
	木村　容子	日本社会事業大学	出
	横山登志子	札幌学院大学	出
	志水　　幸	北海道医療大学	委任状
	川島ゆり子	日本福祉大学	出
	荒井　浩道	駒澤大学	出
	岡田　まり	立命館大学	出
	佐藤　俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	出
	白川　　充	仙台白百合女子大学	出
	杉野　聖子	江戸川学園おおたかの森専門学校	出
	保正　友子	日本福祉大学	出
	ヴィラーグ ヴィクトル	日本社会事業大学	出
監　事	黒木　保博	長野大学	出
	福山　和女	ルーテル学院大学	委任状
庶　務	小野セレスタ摩耶	同志社大学	出

1. 2023 年度役員体制＆委員会体制について

今年度の会長・副会長、および各委員会体制について協議した。基本的には 2022 年度の体制を継続しつつ、理事以外の委員の人選も含めて、次回理事会で確認して、総会で提案する。

2.「人文社会科学系学協会男女参画推進連絡会（GEAHSS）」の担当について

本学会は 72 番目の加盟団体として昨年度に加盟した。運営委員会への出席などについて、久保副会長が担当することとなった。

3. 各委員会より活動報告（前回 1 月 29 日の報告以降分）及び 2023 年度活動計画

○研究推進第 1 委員会

(1) 学会誌編集委員会より、『第 46 号』（2023 年 6 月末発刊予定）の編集作業中の報告があった。1 名の編集委員の交代について提案があり了承された。また、査読報告書や査読ガイドラインの改定作業中である旨の報告があった。

(2) 研究奨励委員会より、現在申請募集中（5 月末日締切、申請がなければ 6 月まで延長）であることと、結果については 7 月開催予定の理事会で審議事項とする旨の報告があった。

(3) 学会賞選考委員会より、2023 年度の学会賞選考の結果、いずれの賞も該当者なしとなり、結果については理事会で承認された。この 3 年間にわたって学会賞、奨励賞ともに該当なしとなっているので、理事会として懸念を共有しつつ、対応について議論をすることとなった。

(4) 2023 年度活動計画については、以下の通りである。

1. 学会誌編集委員会

・学会誌発行に向けての作業：46 号・47 号を学会ホームページ上に電子ジャーナルとして発行する。

あわせて、J-stage、EBSCOhost にも搭載する。

・会員の積極的投稿を促すとともに、学会誌の質の向上を図る。

・学会誌を通して、会員の研究成果をより広く社会に発信できるように努める。

・投稿規程・執筆要領・査読のあり方について継続的な検討を行う。

2. 研究奨励委員会

・会員の個人研究及び共同研究の促進のため、2023 年度会員研究奨励費の申請を受付、審査し、選考を行う。

3. 学会賞選考委員会

・2024 年度学会賞の選考を行う。

○研究推進第２委員会

(1) 第 40 回大会（7 月 8 日、9 日）の企画、準備状況について報告があった。学会企画シンポジウム（9 日開催）について、内容や登壇者、発言内容等に関する提案や相談があり、協議を行った。また、大会参加や自由研究発表の申し込み状況等、懇親会その他のプログラムについても報告があった。

(2) 2022 年度の研究セミナー（3 月 5 日）実施報告があり、当日は 112 名の参加があった旨報告された。2023 年度の企画については今後検討する。

(3) 共同研究について、全母協との共同研究は 2021 年度をもって終了し、2022 年度青森大会で 2 件の自由研究発表を行い、報告書を作成（ＨＰで公開済）した旨の報告があった。また、新たに「多様性と文化的コンピテンスにもとづくソーシャルワークのあり方に関する研究会」の立ち上げについても報告があった。

(4) 2024 年度第 41 回大会開催校について、検討中である旨報告があった。

○研究推進第３委員会

(1) 出版・教材開発班から、「実践研究支援ワークショップ」について 2023 年度も 3 回シリーズで開催予定である旨の報告があった。また、これまでのワークショップ受講生へのフォローアップ研修の開催についても報告があった。さらに 2023 年度第 40 回大会では特定課題セッションを企画して、これまでの実践研究支援ワークショップの取り組みを振り返るとともに、今後への方向性を確認する旨の報告があった。

(2) 社会貢献推進班から、「ソーシャルワーク・コラボセミナー in 青森」（2023 年 2 月 19 日（日）13:00 ～ 18:00（対面とオンラインとのハイブリッド開催、参加者総数 110 名）の報告があった。また、2023 年度のコラボセミナーに 7 ついて、「こどもアドボケイトの課題と展望（仮）」というテーマを設定して、東京都社会福祉協議会とコラボレーションの予定である旨の報告があった。

○国際委員会

(1) 2022 年度実施事業として、国際シンポジウム「ソーシャルワークと戦争～避難民支援をめぐる実践・教育のグローカル連携～」（日英同時通訳）（11 月 12 日（土）オンライン開催）の報告があった。参加人数：事前登録者 327 名、当日視聴者 184 名との報告であった。

(2) 2023 年度活動計画として、国際ソーシャルワーク研究セミナー「カナダにおける先住民ソーシャルワークの歴史的発展と進化する実践モデル－社会政策と先住民固有の知に基づく精神保健福祉アプローチに焦点を当てて－」（2023 年 6 月 10 日（土）開催、日本女子大学目白キャンパスとオンライン（Zoom ウェビナー）のハイブリッド方式）の開催予定である旨報告があった。

○研究倫理委員会

(1) 研究倫理指針の改正案と研究倫理規程・研究倫理委員会規程の制定案について提案があり、協議が行われた。次回理事会で確定したのちに総会で提案、報告の予定。

(2) 2023 年度活動計画としては、①研究倫理指針の改正と研究倫理規程・研究倫理委員会規程の制定を行うこと、②会員に対して研究倫理にかかわる啓発に努めること、③研究倫理上の問題への的確な対応を図ることが報告された。

○総務委員会

(1) 2022 年度の活動（前回理事会報告以降）について、メールマガジンおよびニュースレターの発行および最新号（136 号）の編集状況の報告があった。

(2) 2023 年度活動計画として、メールマガジンやニュースレターの発行、ホームページの充実、役員選挙の実施スケジュール等について報告があった。

4. 会員の動向（前回理事会 2023 年 1 月 29 日以降～ 2023 年 5 月 17 日現在）

(1) 新たに以下の 9 名の入会が承認された。

	会員種別	氏　名	所　属
1	正会員	仁科　雄介	文京学院大学
2	正会員	氏家　享子	東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科
3	正会員	柴田　祐樹	社会福祉法人　侑愛会　ワークセンターほくと
4	正会員	逢坂　由紀	認定 NPO 法人フローレンス
5	正会員	橋詰　幸輝	立命大学
6	正会員	小沼　聖冶	聖学院大学　心理福祉学部
7	正会員	工藤　昭子	国際武道大学
8	正会員	竹森　美穂	関西学院大学　人間福祉学部社会福祉学科
9	正会員	尾崎　麻里	青山県立保健大学

(2) 以下の 13 名の退会希望があり、承認された。

渡邊庸介、村上信、菅原勇人、西野緑、中野茂、滝口真、牛田稔一、古屋龍太、丸山裕子、岡田多恵子、松山博光、市川和男、熊上崇

5. 2023 年度の理事会の日程について

今後の理事会日程について、以下の通り確認された。

・次回（2023 年度第 2 回）理事会予定：7 月 2 日（日）17 時～（オンライン）

・第 3 回は 2022 年 11 月中旬、第 4 回は 2024 年 1 月上旬、第 5 回理事会は 2024 年 3 月下旬に開催予定

6. その他

(1)『ソーシャルワーク研究』（中央法規出版）第 5 号（2023 年 11 月 10 日原稿締切／ 2024 年 1 月末発行）の特集（日本ソーシャルワーク学会担当）案について、以下の通り提案があった。

＜テーマ＞「ソーシャルワーク実践はその拠りどころを何に求めるか」

＜趣　旨＞理論と実践の相互作用が、実践学といわれるソーシャルワークにおいて不可欠であることはいうまでもない。勘と経験に依拠する実践から、一定の科学の成果や法則を採用して応用する科学的実践へ、さらに進めて、実践活動を体系的に積み上げ、そこから一定の経験法則を抽出していくような、実践の科学化が追究されてきた。また、当事者の発信による支援論の構築も進められている。

ソーシャルワークは価値の実践といわれ、価値が重要視されてきたが、価値だけを拠り所として実践は成り立つのだろうか。一方、科学の原理、科学的方法を基本とする思考の枠組みのみに依拠するのだろうか。実践の場では、理論知、経験知、実践知、当事者の知など、さまざまな知が混在し作用している。ソーシャルワーク実践は特定のなにかに依拠しているといいがたい様相を呈しており、対応する課題によっても、多様である。以上のような状況を踏まえて、本特集では、ソーシャルワーク実践が何を拠りどころにしているのか、多角的に検討してみたい。それは、ソーシャルワークとは何か、その探究でもある。

(2) 理事会（全体会議）終了後、各委員会の今年度事業に関する打ち合わせが行われた。

Ⅳ．2023 年度第 2 回理事会報告

○日時：2023 年 7 月 2 日（日）17 時～ 19 時（WEB（Zoom）会議）

○出席・欠席者一覧

役職	氏　名	所　　属	出欠
会　長	小山　　隆	同志社大学	出
副会長	久保　美紀	明治学院大学	出
	和気　純子	東京都立大学	出
	大島　　巌	東北福祉大学	出
	空閑　浩人	同志社大学	出
理　事	池田　雅子	北星学園大学	出
	大谷　京子	日本福祉大学	出
	木村　容子	日本社会事業大学	出
	横山登志子	札幌学院大学	欠
	志水　　幸	北海道医療大学	出
	川島ゆり子	日本福祉大学	出
	荒井　浩道	駒澤大学	委任状
	岡田　まり	立命館大学	出
	佐藤　俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	出
	白川　　充	仙台白百合女子大学	出
	杉野　聖子	江戸川学園おおたかの森専門学校	出
	保正　友子	日本福祉大学	出
	ヴィラーグ ヴィクトル	日本社会事業大学	出
監　事	黒木　保博	長野大学	欠
	福山　和女	ルーテル学院大学	委任状
庶　務	小野セレスタ摩耶	同志社大学	出

1. 名誉会員の推挙について

岡本民夫会員および副田あけみ会員を名誉会員に推挙する提案があり、承認された。

2. 第 40 回大会（7 月 8 日（土）、9 日（日））について

準備状況や参加申し込み状況等の報告があった。関係者を合わせると 170 ～ 180 名の参加者数になる見込みである旨報告があった。当日のプログラム等の確認が行われた。

3. 役員選挙（選挙管理委員）について

2023 年度の役員選挙の実施に伴い、選挙管理委員候補者として、以下の 3 名の会員が推薦され、承認された。

○新藤健太会員（日本社会事業大学）○根本貴子会員（佐久大学）○廣野俊輔会員（同志社大学）

4. 2023年度総会（7月9日開催）資料（案）について

第40回大会時の7月9日（日）開催の2023年度総会について、「総会資料（案）に沿って、議案内容についての確認や協議を行った。

5. 各委員会からの報告事項等

○研究推進第1委員会

学会誌編集委員会からは学会誌第46号（2023年6月）刊行の報告、研究奨励委員会からは申請締切を6月末まで延長し、申請があった場合は研究推進第一委員会での審査を経て、理事会でのメール審議をお願いしたい旨の報告があった。また、学会賞選考委員会の委員についての提案があり、了承された。

○研究推進第2委員会

2024年第41回大会について、東京都立大学を会場にして、実行委員会方式で開催する予定である旨の報告があった。また、2023年度研究セミナーの開催について、日程や開催方式に関する提案があった。

○研究推進第3委員会

2023年度の実践研究ワークショップおよびコラボセミナーの開催や企画内容について報告があった。

○国際委員会

6月30日（土）に開催された「国際ソーシャルワーク研究セミナー」の報告があった。

○研究倫理委員会

研究倫理指針の一部改正、研究倫理規程・研究倫理委員会規程の制定案の提案があり、承認された。研究倫理規定案については総会での審議事項となり、倫理指針改正案と委員会規定案は総会での報告事項となる旨確認された。

○総務委員会

ニュースレター137号の編集（第40回大会報告記事）について、原稿執筆等の協力依頼があった。

6. 会員の動向

前回理事会（5月21日）以降に申し込みのあった以下の4名の入会が承認された。また、この間の退会の申し出はなかった。

	会員種別	氏　名	所　属
1	正会員	戸井　宏紀	東洋大学　福祉社会デザイン学部　社会福祉学科
2	正会員	西村　圭司	東洋大学　福祉社会デザイン学部　社会福祉学科
3	正会員	工藤　昭子	国際武道大学・日本社会事業大学大学院
4	正会員	丹羽　宏太	特定非営利活動法人くらし応援ネットワーク

7. 今後の理事会日程および開催形式について

今後の理事会の開催予定と開催方式について提案され、了承された。

Ⅴ．2023 年度総会報告

日本ソーシャルワーク学会　2023 年度総会報告

2023 年度総会は、7 月 9 日（日）（12 時～ 12 時 50 分）に、対面（第 40 回大会会場）とオンラインによるハイブリッド形式によって開催されました。総会議長の田中尚会員（東北福祉大学）による進行のもと、提案された以下の議案について、すべて承認されました。

Ⅰ．議案

議案〔1〕 2022 年度活動報告（案）

1．2022 年度理事会開催報告

第 1 回：2022 年 5 月 29 日（日）18 時～ 20 時 30 分（＊ web 会議）

〔内容〕学会賞の選考、各委員会活動報告、2022 年度委員会構成の確認、2022 年度活動計画、会員の異動ほか

第 2 回：2022 年 6 月 25 日（土）18 時～ 19 時 30 分（＊ web 会議）

〔内容〕2021 年度活動報告＆決算報告、2022 年度活動計画＆予算、会員の異動ほか

第 3 回：2022 年 11 月 6 日（日）18 時～ 19 時 30 分（＊ web 会議）

〔内容〕各委員会活動報告＆予定、会員の異動ほか

第 4 回：2023 年 1 月 29 日（日）18 時～ 20 時（＊ web 会議）

〔内容〕各委員会活動報告＆予定、会員の異動ほか

2．2022 年度第 39 回大会開催報告

以下のとおり第 39 回大会を開催した。約 100 名の参加者があった。

大会日時：2022 年 7 月 2 日（土）・3 日（日）

大会テーマ：「人口減少地域におけるソーシャルワークの可能性」

大会担当：青森県立保健大学・第 39 回大会実行委員会（オンライン開催）

第 39 回大会実行委員長：児玉寛子（青森県立保健大学）

プログラム

【1 日目：7 月 2 日（土）】

・10：30 ～ 10：45　開会式

・10：45 ～ 11：45　基調講演「自殺に至る心理的過程と予防的介入－地域における予防モデル構築－」
青森県立保健大学　健康科学部　社会福祉学科教授　大山博史

・12：00 ～ 13：00　2022 年度学会総会

・13：30 ～ 16：00　開催校企画シンポジウム「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性」

シンポジスト　井上雅哉（青森県鰺ヶ沢町社会福祉協議会　事務局長）
大橋一之（社会福祉法人　あ～るど　理事長）
池田右文（（株）池田介護研究所　代表）

コーディネーター　空閑浩人（本学会副会長、同志社大学）

【2 日目：7 月 3 日（日）】

・10：00 ～ 12：30　学会企画シンポジウム（オンライン）

「『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』からの理論的・実践的問い直し」

発題者①理論的立場から「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」とは何か

法政大学　高良麻子

発題者②国際的文脈における「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」

東京都立大学　和気純子

発題者③実践的立場から「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」について考えること

NPO 法人リカバリー代表　大嶋栄子

コメンテーター　　同志社大学　木原活信

コーディネーター　札幌学院大学　横山登志子（＊企画・運営：研究推進第二委員会）

・13：30 ～ 16：20　　自由研究発表（オンライン）（3 分科会合計 13 件の発表があった。）

3. 2022 年度委員会活動報告

（1）研究推進第 1 委員会　（＊は役員以外の委員）

委員長：久保美紀（副会長）

委　員：荒井浩道　大谷京子　岡田まり　木村容子　川島ゆり子　福山和女

・学会誌編集委員会　◎大谷京子　岡田まり　木村容子　荒井浩道（＊加山弾　＊梅崎薫）

・学会賞選考委員会　川島ゆり子　小山隆　久保美紀（＊木村真理子　＊片岡靖子　＊奥村賢一）

・研究奨励委員会　岡田まり

〇学会誌編集委員会

・第 44 号を 2022 年 6 月に発刊した（グッドプラクティショナー 1 本、書評 1 本を掲載）

・第 45 号を 2022 年 12 月に発刊した（調査報告 2 本、グッドプラクティショナー 1 本、書評 1 本を掲載）

・学会誌 46 号（2022 年 12 月末投稿締切：投稿原稿 1 本（論文 1 本））の発刊に向けて査読等を行った。

・「日本ソーシャルワーク学会機関誌編集委員会規程」を一部変更し、査読過程のより一層の円滑化を図った（2022 年 5 月 29 日施行）。

〇学会賞選考委員会

・2022 年度の学会賞は、選考の結果いずれの賞（学術賞、学術奨励賞）も該当者なしとなった。

・2023 年度の選考に向けて、会員からの推薦（締切：2023 年 1 月末日）を含めて選考作業を行った。

〇研究奨励委員会

・会員研究奨励費については、同年 6 月末日まで申請期間を延長したが、申請がなかった。

・2023 年度の会員研究奨励費の募集をＭＭ、ＨＰなどで行った。

（2）研究推進第 2 委員会

委員長：和気純子（副会長）

委　員：荒井浩道　ヴィラーグ　ヴィクトル　志水幸　白川充　杉野聖子　横山登志子

〇大会企画

① 2022 年度第 39 回大会の開催（前掲）

② 2023 年度第 40 回大会（宮城大会）について、以下の通り内容の企画や調整を行った

・テーマ「実践現場からの情報発信と実践研究～震災復興支援の経験を踏まえて～」

・開催日時：2023 年 7 月 8 日（土）、7 月 9 日（日）

・開催場所および開催方法：対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式
（※ただし自由研究報告は、対面会場のみに限定）

・対面会場：東北福祉大学仙台東口キャンパス、オンライン会場：Zoom 使用

・主催大会校・主催団体：学校法人梅檀学園東北福祉大学
・大会長：東北福祉大学学長 千葉公慈
・実行委員長：田中尚（東北福祉大学教授）

〇研究集会企画

以下の通り、研究セミナーを開催した。
テーマ：子ども家庭福祉ソーシャルワークの新たなニーズ・実践と専門職
開催日：2023 年 3 月 5 日（日）13：00-16：00
開催方法：オンライン（Zoom ミーティング）参加費：無料

プログラム：

13：00-13：10　挨拶・趣旨説明　和気純子氏（東京都立大学，本学会副会長）
13：10-13：50　基調講演　山野則子氏（大阪公立大学）
「子ども家庭福祉ソーシャルワークの新たなニーズとその対応―エビデンスに基づく仕組みづくり」
13：50-15：50　シンポジウム
登壇者　・打越雅祥氏（世田谷区子ども・若者部要保護児童支援専門員）
「“こども家庭センター”設置と虐待対応の課題」
・幸重忠孝氏（特定非営利活動法人こどもソーシャルワークセンター）
「まちの子どもソーシャルワーク実践」
・橋本達昌氏（全国児童家庭支援センター協議会）
「時代を画する児童家庭支援センター＋児童養護施設による地域支援」
司会・進行　・杉野聖子氏（江戸川学園おおたかの森専門学校，本学会理事）
・荒井浩道氏（駒澤大学，本学会理事）
15：50-16：00　総括・挨拶　木村容子氏（日本社会事業大学，本学会理事）

〇共同研究

・全国母子生活支援施設協議会との共同研究（2019 年 12 月～）について、第 39 回大会（青森大会）で発表を行った。また、以下の研究報告書を発刊した。
『社会福祉施設におけるレジデンシャル・ソーシャルワーク（Residential Social Work）の構想と定着に関する実証的研究―母子生活支援施設の機能強化を中心に―』（2022 年 11 月 6 日）
・以下の通り、2023 年度の共同研究について計画策定、検討や打ち合わせを行った。

1　共同研究課題名
「多様性と文化的コンピテンスにもとづくソーシャルワークのあり方に関する研究」

2　研究目的
グローバリゼーションや世界各地における内戦や戦争の頻発により、日本においても在留外国人が増加し、多文化共生社会の構築が求められている。文化には、国籍や民族性のみならず、性別、性的指向、障がい、年齢、宗教など多様な次元が含まれ、多文化共生社会の実現を図るソーシャルワークは、このような文化の多様性や差異のアイデンティへの影響と、それらに起因する抑圧や差別のメカニズムの理解と対応を必要とする。本研究は、このような視点から、多様性や文化的コンピテンスに関わるソーシャルワークに関して、グローバルな視点から先行研究の検討を行うとともに、日本におけるニーズと実践の現状を明らかにし、求められるソーシャルワークのあり方を追究することを目的とする。

3　研究会体制
和気純子　横山登志子　ヴィラーグ　ヴィクトル　大谷京子（理事）

大嶋栄子　大和三重　加藤慶　添田正輝　武田丈　松尾加奈　松岡克尚　宮崎理（会員）
荻野剛史　東田全央（オブザーバー）

4　研究会の開催

第１回研究会　2023 年２月 11 日　15 時～　テーマ「2023 年度の研究計画について」

(3) 研究推進第３委員会（＊は役員以外の委員）

委員長：大島 巌（副会長）

委　員：池田雅子　木村容子　佐藤俊一　白川充　保正友子　川島ゆり子　小野セレスタ摩耶
（＊浅野貴博　＊野村裕美）

・出版、教材開発班：保正友子　池田雅子　佐藤俊一　白川充　大島巌（＊浅野貴博）

・社会貢献推進班：大島巌　木村容子　川島ゆり子　小野セレスタ摩耶（＊浅野貴博　＊野村裕美）

〇出版・教材開発班

①「実践研究支援ワークショップ」を以下の通り開催した。

・開催日時：〔1 日目〕2022 年 10 月 9 日（日）13 時～ 17 時
〔2 日目〕2022 年 11 月 13 日（日）13 時～ 17 時
〔3 日目〕2022 年 12 月 25 日（日）13 時～ 16 時

・実施方法：オンラインにより開催（Zoom）・参加費：5,000 円

・参加者数（※参加定員 35 人）申込者数：33 人→うち５人は１日目の前にキャンセル（返金処理済）
〔1 日目〕27 人　〔2 日目〕23 人　〔3 日目〕17 人

② 2023 年度のワークショップ、フォローアップ研修の企画等について検討を行った。

〇社会貢献推進班

① 2022 年度のソーシャルワーク・コラボセミナーを青森県社会福祉士会との共同企画で実施した。

テーマ「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2022in 青森：人口減少地域のソーシャルワークの創造性（その 2）～包摂的な活力ある地域社会づくりとひとづくりの視点から～」

・開催日時：2023 年２月 19 日（日）13：00-18：00

・開催場所および開催方法：対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式

・対面会場：青森県立保健大学 B 棟　オンライン会場：Zoom 使用　（参加者総数：110 名）

・プログラム

＜第１部＞ 13：00-16：00

13：00 開会挨拶　小山隆氏（日本ソーシャルワーク学会会長／同志社大学）

13：10-14：00　基調講演「人口減少地域のソーシャルワークの創造性」
川島ゆり子氏（本学会理事／日本福祉大学）

14：10-15：50　シンポジウム

「人口減少地域のソーシャルワークの創造性～包摂的な活力ある地域社会づくりとひとづくり～」

〔登壇者〕青森県（福）鰺ヶ沢町社会福祉協議会 事務局長　井上雅哉氏
秋田県（福）藤里町社会福祉協議会 会長　菊池まゆみ氏
岩手県（一社）トナリノ 代表理事　佐々木信秋氏

〔コーディネーター〕浅野貴博氏（ルーテル学院大学）、大島巌氏（本学会副会長／東北福祉大学）

〔コメンテーター〕川島ゆり子氏（同上）

〔指定発言者〕（公社）青森県社会福祉士会副会長　納谷むつみ氏（予定）、ほか

15：50　中締め挨拶 鳴海春輝氏（（公社）青森県社会福祉士会会長）

＜第 2 部＞ 16：10-18：00

北東北三県社会福祉士会ユース部会による座談会・ワールドカフェ

テーマ「人口減少地域におけるソーシャルワーク実践を考える～互いの“境”を越えて～」

〔コーディネーター〕平野絢子（公社・青森県社会福祉士会ユース部会）・野村裕美（同志社大学）

16：10　開会挨拶

16：15-16：35　北東北三県ユース部会長・委員長より＜第 1 部＞への所感報告

16：35-17：40　ワールドカフェ　17：40-17：55　グループ発表・まとめ　17：55-18：00　閉会挨拶

② 2023 年度のソーシャルワーク・コラボセミナーについて検討を行った。

(4) 国際委員会

委員長：黒木保博

委　員：ヴィラーグ　ヴィクトル　志水幸　（＊浅野貴博　＊松尾加奈）

＊下記の通り、国際シンポジウムを開催した。

国際シンポジウム「ソーシャルワークと戦争～避難民支援をめぐる実践・教育のグローカル連携～」（日英同時通訳）（オンライン開催）

・日時：2022 年 11 月 12 日（土）17：00 ～ 19：00

・参加人数：事前登録者 327 名　当日視聴者 184 名

・共催団体　日本ソーシャルワーク学会　日本ソーシャルワーク教育学校連盟

(5) 研究倫理委員会（＊は役員以外の委員）

委員長：久保美紀（副会長）

委　員：佐藤俊一（＊稲垣美加子　＊松倉真理子）

・会員に対して研究倫理にかかわる啓発に努めた。

・2022 年度は研究倫理上の問題は発生しなかった。

・「日本ソーシャルワーク学会研究倫理指針」の改定作業に取り組むとともに、「日本ソーシャルワーク学会研究倫理規程」及び「日本ソーシャルワーク学会研究倫理委員会規程」の制定に向けて、作業を進めた。

(6) 総務委員会

委員長：空閑浩人（副会長）

委　員：池田雅子　杉野聖子　保正友子　横山登志子　小野セレスタ摩耶

庶務担当：小野セレスタ摩耶　　委託業者 ㈱ワールドプランニング

①ニュースレターの発行

・133 号（2022 年 6 月 5 日）、134・135 合併号（2023 年月 3 月 15 日）を発行した

②メールマガジン（MM）の配信と SNS の活用

・第 102 号（2022 年 4 月）～第 113 号（2023 年 3 月）の毎月の配信を行った

・フェイスブックなどＳＮＳを活用した情報発信を行った

③ホームページの運営管理

・大会、コラボ、セミナー等資料、ニュースレターのアップその他コンテンツの充実等に努めた

④その他・庶務事項等

1)「入会申込書」の改訂を行った。

2)「人文社会科学系学協会男女参画推進連絡会（GEAHSS)」へ加盟した（本学会は 72 番目の加盟団体として 2022 年 11 月に加盟)。

3）日本学術会議のあり方に関する日本社会福祉系学会連合による以下の声明（2023 年 1 月 23 日付）に本学会も会長名で賛同した。

内閣府による「日本学術会議の在り方についての方針」に関する会長声明

2022 年 12 月 6 日に「日本学術会議の在り方についての方針」(以下「方針」）が内閣府より公表されました。また、同年 12 月 21 日開催の日本学術会議総会では、この方針に沿った「日本学術会議の在り方について（具体化検討案)」(以下「具体化検討案」）の説明が、内 閣府よりなされました。さらに、これらの内容を盛り込んだ日本学術会議の改正法案を、この春にも国会に提出する予定であることが示されました。 これらの「方針」や「具体化検討案」のなかには、会員の選考に意見を述べる第三者委員 会の設置に加え、学術会議以外からの会員候補者の推薦を可能にすることが記されています。会員の選考へ第三者が介入することは、会員選考が外部から管理されることになり、首相の任命権の強化や任命拒否の正当化につながることが危惧されます。また、政府から独立して職務を行う学術会議の独立性を危うくし、学術会議の存在意義にもかかわる事態をもたらすことにもなりかねません。 加えて、十分な議論がなされないままに、拙速に法改正を進めようとしている点にも強い危惧を抱かざるを得ません。 よって、日本学術会議が発出した声明に支持を表明し、このような事態を深刻に懸念するとともに、「方針」及び「具体化検討案」の再考を強く求めます。

2023 年 1 月 23 日

日本社会福祉系学会連合会長　保正 友子
日本社会福祉学会会長　空閑 浩人
社会事業史学会会長　金子 光一
日本社会分析学会会長　稲月 正
日本職業リハビリテーション学会会長　朝日 雅也
日本ソーシャルワーク学会会長　小山 隆
日本福祉介護情報学会代表理事　生田 正幸
日本保健医療社会福祉学会会長　髙山 恵理子
日本介護福祉学会会長　加瀬 裕子
日本福祉文化学会会長　石田 易司
日本精神障害者リハビリテーション学会会長　池淵 恵美
日本看護福祉学会理事長　生野 繁子
日本社会福祉教育学会会長　志水　幸

4)（株）ワールドプランニングへの業務委託について

・委託している業務内容

①会員管理、②学会経費等の経理業務、③学会事務用品の管理、④学会事務運営

・2022 年度分の会費入金率：97.7%　・2022 年度分の会費請求（2 月、7 月、11 月の年 3 回請求）

(7) 正副会長会議

会　長　小山隆　　副会長　大島巌　久保美紀　和気純子　空閑浩人

（＊第 1 回、第 2 回については前副会長の志水幸理事も出席）

①正副会長会議の開催報告

第 1 回：2022 年 5 月 22 日（日）17 時～ 18 時 30 分（＊ web 会議）

第 2 回：2022 年 6 月 25 日（土）17 時～ 18 時（＊ web 会議）

第 3 回：2022 年 11 月 6 日（日）17 時～ 18 時（＊ web 会議）

第4回：2023年1月22日（日）17時～18時30分（＊web会議）

②特命事項と担当副会長

・職能団体との連携（大島巌）　・学会資料のアーカイブ化（久保美紀）

・他学会との連携（和気純子）　・組織強化＆学会広報（空閑浩人）

③『ソーシャルワーク研究』誌のリニューアル刊行について

1975年より、社会福祉実践の総合研究誌として相川書房より刊行されていた『ソーシャルワーク研究』は、日本ソーシャルワーク学会、日本ソーシャルワーカー連盟、日本ソーシャルワーク教育学校連盟が編集・広報協力団体となり、中央法規出版より従来通り、季刊誌として刊行されることになった。2023年1月にリニューアル創刊号、同年4月に第2号が刊行された。本学会は、「実践と理論の研究」コーナーで、毎号、学会活動等の紹介記事を掲載するとともに、年1回、特集論文の企画を担当することになった。

4. 2022年度会員異動報告

①2022年度入会者　13名（正会員13名）　②2022年度退会者18名

③2023年3月31日現在の総会員数　625名（正会員619名、準会員4名、賛助会員2団体）

議案〔2〕 2022年度　決算報告（案）

1. 2022年度収支決算報告（30-31頁参照）

・一般会計の部　・特別会計（学会賞）の部　・特別会計（出版）の部

2. 2022年度監査報告

2023年6月14日（水）黒木保博監事、福山和女監事による監査が同志社大学新町キャンパスで行われ、別紙の通り、監査報告書が提出された。

議案〔3〕 2023年度活動計画（案）

1. 2023年度役員体制

役　職	氏　名	理事・役員　任期	備　　考
会長	小山　　隆	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	
副会長	久保　美紀	2020.7.4 ～ 2024. 総会終了時	研究推進第1委員会委員長／研究倫理委員会委員長
	和気　純子	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	研究推進第2委員会委員長
	大島　　巌	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	研究推進第3委員会委員長
	空閑　浩人	2020.7.4 ～ 2024. 総会終了時	総務委員会委員長
理　事	大谷　京子	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	研究推進第1委員会
	岡田　まり	2020.7.4 ～ 2024. 総会終了時	研究推進第1委員会
	木村　容子	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	研究推進第1委員会／研究推進第3委員会
	川島ゆり子	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	研究推進第1委員会／研究推進第3委員会
	荒井　浩道	2020.7.4 ～ 2024. 総会終了時	研究推進第1委員会／研究推進第2委員会
	池田　雅子	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	研究推進第3委員会／総務委員会
	白川　　充	2020.7.4 ～ 2024. 総会終了時	研究推進第2委員会／研究推進第3委員会
	杉野　聖子	2020.7.4 ～ 2024. 総会終了時	研究推進第2委員会／総務委員会
	横山登志子	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	研究推進第2委員会／総務委員会
	ヴィラーグ ヴィクトル	2020.7.4 ～ 2024. 総会終了時	研究推進第2委員会／国際委員会
	志水　　幸	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	研究推進第2委員会／国際委員会
	佐藤　俊一	2020.7.4 ～ 2024. 総会終了時	研究推進第3委員会／研究倫理委員会
	保正　友子	2020.7.4 ～ 2024. 総会終了時	研究推進第3委員会／総務委員会
監　事	福山　和女	2022.7.2 ～ 2024. 総会終了時	研究推進第1委員会
	黒木　保博	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	国際委員会委員長
庶務担当理事	小野セレスタ摩耶	2022.7.2 ～ 2026. 総会終了時	研究推進第3委員会／総務委員会

2. 2023 年度委員会体制（＊は役員以外の委員）

①研究推進第 1 委員会

委員長：久保美紀（副会長）

委　員：荒井浩道　大谷京子　岡田まり　福山和女　木村容子　川島ゆり子

・学会誌編集委員会　◎大谷京子　岡田まり　木村容子　荒井浩道（＊梅崎薫　＊倉持香苗）

・学会賞選考委員会　川島ゆり子　小山隆　久保美紀（＊木村真理子　＊奥村賢一　＊高良麻子）

・研究奨励委員会　岡田まり

②研究推進第 2 委員会

委員長：和気純子（副会長）

委　員：荒井浩道　ヴィラーグ　ヴィクトル　志水幸　白川充　杉野聖子　横山登志子

③研究推進第 3 委員会

委員長：大島 巌（副会長）

委　員：池田雅子　木村容子　佐藤俊一　白川 充　保正友子　川島ゆり子　小野セレスタ摩耶

（＊浅野貴博　＊野村裕美）

④国際委員会

委員長：黒木保博

委　員：ヴィラーグ　ヴィクトル　志水幸　（＊浅野貴博　＊松尾加奈）

⑤研究倫理委員会

委員長：久保美紀（副会長）

委　員：佐藤俊一（＊松倉真理子　＊稲垣美加子）

⑥総務委員会

委員長：空閑浩人（副会長）

委　員：池田雅子　杉野聖子　保正友子　横山登志子　小野セレスタ摩耶

庶務担当：小野セレスタ摩耶

3. 2023 年度委員会活動計画

(1) 正副会長会議

・学会運営について情報を共有し円滑に活動を進めるよう、3 か月に 1 回程度（基本は理事会の 1 週間前）会議を開催し協議する。

・各委員会の事業の進行管理の他、理事会の体制強化、学会の企画広報、職能連携、他学会との連携等の学会運営の課題（特命事項）について取り組んでいく。

・特命事項と担当副会長

・職能団体との連携（大島　巌）　・学会資料のアーカイブ化（久保美紀）

・他学会との連携（和気純子）　・組織強化＆学会広報（空閑浩人）

(2) 研究推進第 1 委員会

1. 学会誌編集委員会

①学会誌発行に向けての作業：46 号・47 号を学会ホームページ上に電子ジャーナルとして発行する。あわせて、J-stage、EBSCOhost にも搭載する。

②会員の積極的投稿を促すとともに、学会誌の質の向上を図る。

③学会誌を通して、会員の研究成果をより広く社会に発信できるように努める。

④投稿規程・執筆要領・査読のあり方について継続的な検討を行う。

2. 学会賞選考委員会

① 2023 年度の学会賞は、選考の結果いずれの賞（学術賞、学術奨励賞）も該当者なしとなった。

② 2024 年度学会賞の選考を行う

3. 研究奨励委員会

・会員の個人研究及び共同研究の促進のため、会員研究奨励費の申請を受付、審査し、選考を行う。

(3) 研究推進第 2 委員会

1. 2023 年度研究セミナー企画について検討する。

2. 共同研究について

＊「多様性と文化的コンピテンスにもとづくソーシャルワークのあり方に関する研究」を進める

＊研究会の予定　第 2 回研究会　2023 年 5 月 21 日　発題者　松岡克尚氏　宮崎理氏

第 3 回研究会　2023 年 8 月 6 日　発題者　ヴィラーグ　ヴィクトル氏　加藤慶氏

＊第 3 回研究会は札幌学院大学新札幌キャンパスの教室とオンラインのハイブリッド開催

希望者はウポポイを訪問、アイヌ文化について学ぶ。

＊研究会はオンラインにて会員等に公開する。

3. 2024 年度第 41 回大会開催校について調整、打診を行う。

(4) 研究推進第 3 委員会

①出版・教材開発班

1）実践研究支援ワークショップ

2023 年度も、3 回シリーズで実践研究支援ワークショップを開催する予定。

具体的には、9 月 24 日（日）、10 月 22 日（日）、11 月 19 日（日）午後に Zoom で行う。

2）フォローアップ研修（これまでの受講生へのフォローアップ研修）

これまでの実践研究支援ワークショップの受講者を対象にして、研究の進捗状況を確認し、次の作業に向けたフォローアップを行うことを目的に、5 月 7 日（日）に Zoom で実施した。主に、2023 年度と 2024 年度の全国大会での発表予定者 6 人が受講した。

全体で現状の共有を行った後に、2 グループに分かれて個々人の研究進捗状況とコメントを行い、最後に全体でまとめを行った。

3）2023 年度全国大会での特定課題セッションの実施

第 40 回大会において特定セッションを設定し、これまでの実践研究支援ワークショップの取り組みを振り返るとともに、今後への方向性を確認する。その際これまでの受講生による報告を予定。

②社会貢献推進班

○ 2023 年度のコラボセミナーの予定

テーマ「こどもアドボケイトの課題と展望（仮）」

東京都社会福祉協議会とコラボレーションし、今変わりつつある子どもアドボケイトの現状や課題、今後のあるべき姿について議論することを検討中。

(5) 国際委員会

○国際ソーシャルワーク研究セミナーの実施

「カナダにおける先住民ソーシャルワークの歴史的発展と進化する実践モデル－社会政策と先住民固有

の知に基づく精神保健福祉アプローチに焦点を当てて－」

・日時：2023 年 6 月 10 日（土）13：00 ～ 15：30（日本標準時間）

・会場と形式：日本女子大学目白キャンパス（120 年館 12009 教室）とオンライン（Zoom ウェビナー）のハイブリッド

・参加費：無料（日英同時通訳あり）

・共催：国際ソーシャルワーク協会・日本ソーシャルワーク学会

・科研費　若手研究　第 19K14002 事業

・後援：日本ソーシャルワーク教育学校連盟、日本ソーシャルワーカー連盟［日本社会福祉士会・日本精神保健福祉士協会・日本医療ソーシャルワーカー協会・日本ソーシャルワーカー協会］

(6) 研究倫理委員会

①「日本ソーシャルワーク学会研究倫理指針」の改正と「日本ソーシャルワーク学会研究倫理規程」および「日本ソーシャルワーク学会研究倫理委員会規程」の制定を行う。

②会員に対して研究倫理にかかわる啓発に努める。

③研究倫理上の問題への的確な対応を図る。

(7) 総務委員会

①メールマガジンの発行：毎月発行予定（編集担当：保正、横山、空閑）

・ 4 月（114 号）空閑　・ 5 月（115 号）横山　・ 6 月（116 号）保正

・ 7 月（117 号）空閑　・ 8 月（118 号）横山　・ 9 月（119 号）保正

・10 月（120 号）空閑　・11 月（121 号）横山　・12 月（122 号）保正

・ 1 月（123 号）空閑　・ 2 月（124 号）横山　・ 3 月（125 号）保正

②フェイスブックなどの SNS を活用した情報発信に努める

③ニュースレターの発行：136 号（6 月上旬発行、編集担当：空閑・小野）
137 号（10 月上旬発行予定、編集担当：池田・杉野）
138 号（2024 年 3 月上旬発行予定、編集担当：小野・空閑）

④ホームページの運営管理

・大会、コラボ、セミナー等資料、ニュースレターのアップなどコンテンツや内容の充実に努める。

⑤学会役員選挙を実施する。

⑥その他庶務関係事項

・業務の一部を㈱ワールドプランニングに委託しており、2023 年度も継続して委託する

・委託する業務内容：①会員管理②学会経費等の経理業務③学会事務用品の管理④学会事務運営

4. 2023 年度　第 40 回大会について

・テーマ「実践現場からの情報発信と実践研究～震災復興支援の経験を踏まえて～」

・開催日時：2023 年 7 月 8 日（土）、7 月 9 日（日）

・開催場所および開催方法：対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式
（＊自由研究報告は、対面会場のみに限定）

・対面会場：東北福祉大学仙台東口キャンパス　・オンライン会場：Zoom 使用

5. 学会役員選挙の実施について

＊オンラインによる投票システムを利用して、以下の通り実施する

＊ 2023 年度役員選挙スケジュール（案)】

① 2023 年 7 月：選挙管理委員選出（7 月の総会で報告）

② 2023 年 9 月　第 1 回選挙管理委員会開催

③ 2023 年 10 月：会員調査の実施、選挙人・被選挙人名簿確定＆投票システム設定等確認

④ 2023 年 11 月末：会員名簿、公示文書、投票実施要領、投票システム用圧着はがきの発送

⑤ 2023 年 12 月 1 日：公示

⑥ 2023 年 12 月上旬から中旬：投票

⑦ 2023 年 12 月下旬：第 2 回選挙管理委員会の開催＆開票

⑧選挙当選人への理事・監事就任の打診

⑨ 2024 年 1 月上旬：正副会長会議で報告

⑩ 2024 年 1 月上旬 or 中旬：理事会で報告・当選理事承認および理事会推薦理事の協議

⑪ 2024 年 3 月：学会ホームページ＆ニュースレターで選挙結果の公示

＊ 2023 年度選挙管理委員

新藤健太会員（日本社会事業大学)、根本貴子会員（佐久大学)、廣野俊輔会員（同志社大学）

議案〔4〕 2023 年度　予算（案）[32-33 頁参照]

・一般会計の部　　・特別会計（学会賞）の部　　・特別会計（出版）の部

議案〔5〕「日本ソーシャルワーク学会研究倫理規程」（案）について

・「日本ソーシャルワーク学会研究倫理指針」について

・「日本ソーシャルワーク学会研究倫理委員会規程」について

議案〔6〕次回（2024 年度・第 41 回）大会について

東京都立大学を会場にして、実行委員会方式で開催する予定。

Ⅱ. 報告事項

1. 名誉会員の推挙について

この度、岡本民夫会員、副田あけみ会員が名誉会員として推挙され、7 月 2 日（日）開催の 2023 年度第 2 回理事会で承認された。

2. 関係機関・団体からの寄贈資料および寄贈図書

この 1 年間の本学会への寄贈資料や図書について、報告があった。

Ⅵ．Ⅴに関連しての決算および予算書

日本ソーシャルワーク学会　2022 年度決算書

2023 年 3 月 31 日

Ⅰ．一般会計

1．収入　（単位：円）

項　目		2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	差　異 （収入減 △）	備　考
1	年会費	4,800,000	4,932,000	132,000	正会員：611 件、準会員 4 件、賛助会員 2 件
2	入会金	150,000	95,000	△ 55,000	19 件
3	印税など	100,000	0	△ 100,000	
4	事業収入	50,000	177,320	127,320	著作権使用料、コラボセミナー＆実践研究ワークショップ等参加費
5	雑収入	1,000	1,494	494	利息等
6	寄付金等	0	487,753	487,753	第 39 回大会事務局からの寄付金、会員研究奨励費残金等
	収入小計	5,101,000	5,693,567	592,567	
	前年度繰越金	6,797,284	6,797,284	-	
	収入合計	11,898,284	12,490,851	-	

2．支出　（単位：円）

項　目		2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	差　異 （支出増 △）	備　考
（研究推進第 1 委員会活動費）					
1	学会誌発行費	500,000	440,042	59,958	編集費（2 号分）、英文校閲、執筆料
2	学会賞関連費	500,000	500,000	0	特別会計（学術賞／学術奨励賞）へ繰入
3	会員研究奨励費	500,000	0	500,000	
（研究推進第 2 委員会活動費）					
4	大会関連費	500,000	500,000	0	大会準備費（第 40 回宮城大会準備費として）
5	大会企画費	200,000	0	200,000	
6	研究集会費	200,000	43,411	156,589	研究集会（2022 年度研究セミナー）企画・開催費
7	共同研究費	600,000	0	600,000	
（研究推進第 3 委員会活動費）					
8	出版・教材開発費	300,000	0	300,000	
9	社会貢献推進費	400,000	349,406	50,594	「ソーシャルワークコラボセミナー 2022 in 青森」企画・開催費
（国際委員会）					
10	国際委員会活動費	300,000	133,650	166,350	国際ソーシャルワーク研究セミナー企画・開催費
（研究倫理委員会）					
11	研究倫理委員会活動費	80,000	0	80,000	
（広報・渉外）					
12	福祉系学会連絡協議会等関連費	100,000	105,000	△ 5,000	日本学術協力財団賛助会費、日本社会福祉系学会連合分担金、GEAHSS 会費
13	SCS 研究協議会関連費	110,000	100,000	10,000	SCS 研究協議会分担金
14	学会通信発行費	660,000	345,785	314,215	ニュースレター発行費、発送費（2 号分）
15	ホームページ等運営費	250,000	301,400	△ 51,400	ホームページ委託・管理費、メールマガジン委託費
16	会員拡大・体制整備費	50,000	33,000	17,000	学会プロモーションビデオの一部改訂作業費
（学会運営費）					
17	『ソーシャルワーク研究』誌編集委託費	200,000	220,000	△ 20,000	『ソーシャルワーク研究』誌発行に伴う経費等
18	理事会費	300,000	0	300,000	
19	正副会長会費	50,000	0	50,000	
20	事務局委託費	1,300,000	1,048,300	251,700	学会事務センター（ワールドプランニング）委託費

21	事務局運営費	380,000	421,320	△ 41,320	印刷・発送費、請求書・封筒作成費等
22	アーカイブ化推進費	300,000	366,086	△ 66,086	学会資料（ニューズレター等）のデジタル化等関係費
23	役員選挙費	0	0	0	
（その他）					
24	振込手数料	20,000	45,591	△ 25,591	会費振込に伴う手数料及び年会費（過払分）返金
25	出版準備積立	0	0	0	
26	予備費	100,000	3,520	96,480	弔電代等
	支出小計	7,900,000	4,956,511	2,943,489	
	次年度繰越金	3,998,284	7,534,340	-	2023 年度への繰越金
	支出合計	11,898,284	12,490,851	-	

Ⅱ．特別会計①（学会賞）

1．収入

（単位：円）

項　目		2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	差　異 （収入減 △）	備　考
1	前年度繰越金	3,768,731	3,768,731	0	
2	一般会計からの繰入金	500,000	500,000	0	一般会計「学会賞関連費」より繰入
3	雑収入	0	32	32	利息
	収入合計	4,268,731	4,268,763	32	

2．支出

（単位：円）

項　目		2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	差　異 （支出増 △）	備　考
1	学会賞副賞	300,000	0	300,000	
2	学会賞関連費	500,000	21,574	478,426	書籍代等審査・選考関係費用
3	その他	4,000	660	3,340	振込手数料
4	次年度繰越金	3,464,731	4,246,529	△ 781,798	2023 年度への繰越金
	支出合計	4,268,731	4,268,763	△ 32	

Ⅲ．特別会計②（出版事業）

1．収入

項　目		2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	差　異 （収入減 △）	備　考
1	前年度繰越金	24	24	0	
2	一般会計からの繰入金	0	0	0	
3	雑収入	0	0	0	
	収入合計	24	24	0	

2．支出

項　目		2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	差　異 （支出増 △）	備　考
1	出版事業費	0	0	0	
2	出版事業関連費	0	0	0	
3	その他	0	0	0	
4	次年度繰越金	24	24	0	
	支出合計	24	24	0	

日本ソーシャルワーク学会　2023 年度予算書

2023 年 7 月 9 日

Ⅰ．一般会計

1. 収入

（単位：円）

項　目		2023 年度 予　算	2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	備　考
1	年会費	4,800,000	4,800,000	4,932,000	
2	入会金	150,000	150,000	95,000	
3	印税など	100,000	100,000	0	学会監修出版物印税等
4	事業収入	50,000	50,000	177,320	著作権使用料＆セミナー参加費等
5	雑収入	1,000	1,000	1,494	銀行利息等
6	寄付金等	0	0	487,753	
	収入小計	5,101,000	5,101,000	5,693,567	
	前年度からの繰越金	7,534,340	6,797,284	6,797,284	2022 年度から 2023 年度への繰越金
	収入合計	12,635,340	11,898,284	12,490,851	

2. 支出

（単位：円）

項　目		2023 年度 予　算	2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	備　考
	（研究推進第 1 委員会活動費）				
1	学会誌発行費	500,000	500,000	440,042	編集費（2 号分）、英文翻訳費等、J-STAGE 掲載費等
2	学会賞関連費	500,000	500,000	500,000	特別会計（学会賞）へ繰入
3	会員研究奨励費	500,000	500,000	0	
	（研究推進第 2 委員会活動費）				
4	大会関連費	500,000	500,000	500,000	大会準備費（次回〔2024 年度第 41 回〕大会開催校へ）
5	大会企画費	200,000	200,000	0	大会時の学会企画シンポジウム謝金等関連費
6	研究集会費	200,000	200,000	43,411	研究集会（研究セミナー開催等）事業費
7	共同研究費	600,000	600,000	0	共同研究費、旅費、会議費等
	（研究推進第 3 委員会活動費）				
8	出版・教材開発費	300,000	300,000	0	旅費、会議費、ワークショップ事業費等
9	社会貢献推進費	400,000	400,000	349,406	ソーシャルワーク・コラボセミナー事業費
	（国際委員会）				
10	国際委員会活動費	300,000	300,000	133,650	セミナー開催費、共催事業協賛金、旅費、会議費等
	（研究倫理委員会）				
11	研究倫理委員会活動費	80,000	80,000	0	旅費、会議費等
	（広報・渉外等関係費）				
12	福祉系学会連絡協議会等関連費	110,000	100,000	105,000	日本学術協力財団賛助会費、日本社会福祉系学会連合分担金、GEAHSS 会費
13	SCS 研究協議会関連費	110,000	110,000	100,000	SCS 研究協議会分担金
14	学会通信発行費	660,000	660,000	345,785	ニュースレター印刷・発行費、発送費（3 号分）
15	ホームページ等運営費	300,000	250,000	301,400	ホームページ管理費・メールマガジン委託費
16	会員拡大・体制整備費	50,000	50,000	33,000	広報関係費等
	（学会運営費）				
17	『ソーシャルワーク研究』誌編集委託費	250,000	200,000	220,000	『ソーシャルワーク研究』誌発行に伴う経費等
18	理事会費	300,000	300,000	0	旅費、会議費等
19	正副会長会費	50,000	50,000	0	旅費、会議費等
20	事務局委託費	1,300,000	1,300,000	1,048,300	事務センター（（株）ワールド・プランニング）委託費
21	事務局運営費	400,000	380,000	421,320	印刷・発送費、請求書・封筒作成費等
22	アーカイブ化推進費	300,000	300,000	366,086	学会資料（ニューズレター等）のデジタル化等関係費
23	役員選挙費	900,000	0	0	会員調査・名簿作成、選挙システム整備費等
	（その他）				
24	振込手数料	20,000	20,000	45,591	会費振り込みに伴う手数料等

25	出版準備積立	0	0	0	
26	予備費	100,000	100,000	3,520	
	支出小計	8,930,000	7,900,000	4,956,511	
	次年度繰越金	3,705,340	3,998,284	7,534,340	2024 年度への繰越金
	支出合計	12,635,340	11,898,284	12,490,851	

Ⅱ．特別会計（学会賞関連）

1．収入

（単位：円）

項　目		2023 年度 予　算	2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	備　考
1	前年度繰越金	4,246,529	3,768,731	3,768,731	2022 年度からの繰越金
2	一般会計からの繰入金	500,000	500,000	500,000	一般会計「学会賞関連費」より繰入
3	雑収入	0	0	32	利息
	収入合計	4,746,529	4,268,731	4,268,763	

2．支出

（単位：円）

項　目		2023 年度 予　算	2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	備　考
1	学会賞副賞	300,000	300,000	0	学術賞、学術奨励賞
2	学会賞関連費	500,000	500,000	21,574	選考委員資料購入、会議費、賞状作成費等
3	その他	4,000	4,000	660	振込手数料等
4	次年度繰越金	3,942,529	3,464,731	4,246,529	2024 年度への繰越金
	支出合計	4,746,529	4,268,731	4,268,763	

Ⅲ．特別会計（出版事業関連）

1．収入

項　目		2023 年度 予　算	2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	備　考
1	前年度繰越金	24	24	24	
2	一般会計からの繰入金	0	0	0	
3	雑収入	0	0	0	
	収入合計	24	24	24	

2．支出

項　目		2023 年度 予　算	2022 年度 予　算	2022 年度 決　算	備　考
1	出版事業費	0	0	0	
2	出版事業関連費	0	0	0	
3	その他	0	0	0	
4	次年度繰越金	24	24	24	
	支出合計	24	24	24	

Ⅳ. 会員の声

入会にあたって

青森県立保健大学　**尾崎　麻理**

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会致しました尾崎麻理と申します。医療機関でソーシャルワーカーとして仕事をしてきました。現在は、青森県立保健大学社会福祉学科に勤務し、社会福祉を学ぶ学生の支援を行っております。主な研究は、医療ソーシャルワーク、多様性の尊重というテーマについて研究を進めています。また、医療的ケア児とその家族に対する支援に関する共同研究も進めております。この学会を通して、ソーシャルワークにおける多様性に関する研究や実践活動の学びを深めることができればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

入会にあたり

関西学院大学　**竹森　美穂**

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会させていただきました、竹森美穂と申します。大学卒業後16年間、医療ソーシャルワーカーとして勤務し、2年前からソーシャルワーカー養成に携わっております。主にソーシャルワーク演習や実習指導の授業を担当しており、研究としてはソーシャルワーカーの継続学習に取り組んでおります。ワーカーの多様な継続学習への取り組みや、その環境、方法などについて調査を通じて考えてゆきたいと思っておりまして、現在はワーカーの実践研究への取り組みを調査しています。ワーカーの学びを追うことは、実践能力の向上に留まらず、ワーカーとしての自己や職業観、キャリア、労働環境など様々なことと関連していることから、多面的に考えてゆけるよう心にとめて研究に取り組んでゆきたいと考えています。研究者としてまだまだ未熟ですが、現場に向き合い、先生方に積極的に学んでゆきたいと思っておりますので、どうぞご指導賜りますよう、よろしくお願いいたします。

入会にあたって

立命館大学大学院社会学研究科（博士課程後期課程１回生）　**橋詰　幸輝**

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会致しました橋詰幸輝と申します。現在は、依存症回復施設（アルコール・薬物・ギャンブルが対象）で生活支援員として勤務しながら、立命館大学大学院社会学研究科博士課程後期課程に所属し、研究を進めています。研究テーマは、アルコール依存症からの回復プロセスであり、どうすればより効果的な支援や介入ができるのかについて研究しています。修士学位論文では、「断酒3年以上のアルコール依存症者の回復プロセスに関する研究」をテーマに、個人の行動変容に着目した研究を遂行しました。今後は、当事者や家族、支援者と協働し、理論に基づく実証研究を行うことで、ソーシャルワーク実践モデルの開発を目指しています。本学会への入会をきっかけに、ソーシャルワーク領域の実践と理論を深く学び、自身の研究に活かしていきたいと考えています。さらに、学会や研修会への参加などを通して、積極的にネットワークの形成を行い、諸先生方のご指導を賜りながら、精進していく意気込みですので、どうぞよろしくお願いいたします。

自閉スペクトラム症者を支援する施設ソーシャルワーカーに目を向けて

社会福祉法人　侑愛会　ワークセンターほくと　**柴田　祐樹**

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会致しました柴田祐樹と申します。現在は知的障害・自閉スペクトラム症（以下、ASD）の人の日中活動を支援する生活支援員として施設ソーシャルワーク実践を行っています。また、北海道教育大学の非常勤講師として学生指導も行っております。

これまでの研究ではASD者への直接支援としてソーシャルナラティブやTTAP（TEACCH移行アセスメントプロフィール）を使用した事例研究や事例報告を行ってきました。現在はASD者を支える施設ソーシャルワーカーに目を向けています。ASD者への直接支援技術はリサーチエビデンスに基づいた手法等、様々なエビデンスベースドプラクティスが存在しておりますが、こうした支援技術を用いるためにもソーシャルワークの価値観・支援観というものを、私は大事にしたいと思っています。しかしながら、私が仕事で出会う多くの施設ソーシャルワーカーは自分のことをソーシャルワーカーとして認識していませんでした。生活支援員という職種は、誰もが入職と同時に名乗ることができるようになります。ソーシャルワークの価値観・支援観をどのように現職の施設ソーシャルワーカー（生活支援員）に伝えていくのか、研究や実践を通して深めていきたいと思います。今後もどうぞご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

編集後記

第137号は、学会第40回大会の記事を中心にまとめました。東北福祉大学を大会校とし、宮城県や全国の職能団体との共催で「実践現場からの情報発信と実践研究　～震災復興支援の経験を踏まえて～」をテーマに開催されました。コロナ禍で2020年度からオンライン開催が続きましたが、4年ぶりに現地で開催（自由研究発表以外はオンライン参加も可能）となり、さらに学会創立40周年を迎え、大会記念企画の座談会も盛り込まれ、今後50周年に向けた展望が熱く語られました。基調講演、シンポジウム、記念座談会、そして自由研究発表の様子や1日目の夜に開催された情報交換会での参加者の久々の直接交流をお伝えしたく写真を多くも盛り込みました。

今までの歴史を振り返り、今後の学会の発展に向けて、会員の皆様の学会活動への参加を期待いたします。また研究や実践に関する声をお寄せください。

編集担当：池田雅子、杉野聖子

【訂正】
第136号（6月5日発行）の内容に誤りがありました。
2ページ中段　（誤）宮城県NPO法人トナリノ→（生）岩手県NPO法人トナリノ
以上、お詫びして訂正致します。

【日本ソーシャルワーク学会事務局】
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4－1－1　オザワビル2F（株）　ワールドプランニング内
TEL：03-5206-7431　　FAX：03-5206-7757
E-mail：jsssw@zfhv.ftbb.net　　http://www.jsssw.org